

降圧薬の服用を順守しないと心臓血管病リスクが 1.6 倍に

心臓血管病の予防のために、降圧薬の服用を順守すること重要であるかは十分に解明されていない。そこで本研究では、降圧薬の服薬順守が特定の心臓血管病（虚血性心疾患・脳出血、脳梗塞）の死亡率に及ぼす影響について検討した。

韓国の国民健康保険の登録者から、ランダムに抽出した 3% のサンプル集団のデータを使用した。対象者は、2003 年から 2004 年に降圧薬治療を開始した 20 歳以上の高血圧患者とし、服薬順守良好群（累積服薬順守率 80% 以上）、服薬順守中間群（同 50～80%）、服薬順守不良群（同 50% 未満）に分け、服薬順守率と予後との関連を評価した。結果、33,728 例の適格者のうち、670 例（1.99%）が追跡期間中に冠動脈疾患や脳卒中で死亡した。服薬順守不良群では、良好群よりも心臓血管病による死亡リスクが有意に高く、ハザード比はそれぞれ虚血性心疾患が 1.64（傾向の $P=0.005$ ）、脳出血が 2.19（同 0.004）、脳梗塞が 1.92（同 0.003）であった。心臓血管病による入院の推定ハザード比は、死亡のエンドポイントと一致した。

したがって、降圧薬の服薬順守不良は、特定の心臓血管病（虚血性心疾患・脳出血・脳梗塞）による死亡や入院リスクを有意に上昇させることが示され、臨床での服薬順守の改善と監視システムの重要性が強調される結果となった。

出典：Hypertension. 2016; 67(3): 506-512